

# 十万両の行方

野村胡堂

—

「親分、飯田町の上総屋かすさやが死んだそうですね」

ガラッ八の八五郎は、またニユースを一つ嗅ぎ出して来ました。江戸の町々がすっかり青葉つづに綴られて、時鳥ほととぎすと初鰹はつがっおが江戸ツ子の詩情と味覚をそそる頃のことです。

「上総屋が死んだところで俺の知ったことじゃないよ」

銭形平次は丹精甲斐もない朝顔なえの苗を鉢なえに上げて、八五郎の話には身が入りそうもありません。

「ところが、聞き捨てにならないことがあるんですよ、親分」

「上総屋の死に様が怪しいとでも言うのか」

「二年も前から癩よわを患っていたって言うから、入手にかかって死んだとすれば、町内の外科が下手人見たいなもので——」

「落し話を聴いちゃ居ない、——何が聞き捨てにならないんだ」

平次はようやく朝顔から注意を外らせました。

「金ですよ、親分。上総屋音次郎が、鬼と言われながら、一代にどれほどの金を拵たくわえたと思います？」

ガラッ八はなかなかの話術家です。平次が滅多な事件に手を染めないのを知って、こう乗出さずには居られないように持ちかけるのでした。

「五六万両かな、——有るようでないのは何んとかだと言うから、せいぜい三万両ぐらいのところかな」

「そう思うでしょう。ね、親分」

「イヤにニヤニヤするじゃないか、それとも十万両もあつたというのかい。こちとらから見れば十万両は夢のような大金だが、上総屋なら」

平次はガラツ八に焦<sup>じ</sup>らされると知つて、忌々<sup>いまいま</sup>しくも煙草入を抜いて一服つけました。

「尤もこちとらに十万両もあつた日にゃ、あつしはさつそく十手捕縄と縁を切つて——」

ガラツ八の話は、また妙なところへ飛躍して行きます。

「金貸にでもなつて懐手で暮すつもりだろうが、そうは問屋が卸<sup>おろ</sup>さないよ」

「そんなサモしい根性じゃありませんよ。まず山ノ手の百姓地を五六万坪買つて——」

「大きく出やがったな、人参牛蒡<sup>にんじんごぼう</sup>でも作る気になつたか」

「大違い、——親分に植木屋を始めて貰つて、あつしはそれを江戸の縁日<sup>えんにち</sup>へ持

出して売る」

「馬鹿だなア」

平次は仕様ことなしに苦笑をしました。そんな気でいる八五郎の心根が哀れでもあったのです。

「ね、親分。冗談は冗談として、土総屋の話だが、——誰でも一応は万と纏まとまった金があるに違いないと思うでしょう」

「それがどうした」

「死んでしまった後で、番頭や親類の者が、熊鷹眼くまたかまなこで搜したが、不思議なことにあるものは借金ばかり。何万とある筈の金が、たった十両もないと聴いたらおどろくでしょう」

「驚くよ、——お前の義理でも驚かなくちゃ悪かろう、それからどうした」

「たったそれだけだが、ちよいと変じゃありませんか親分。神田から番町へか

けて、並ぶ者のないと言われた上総屋音次郎が、死んで一文もないなんぞ、皮ひ肉過にくぎますよ」

「捜しようが悪かったんだろう」

「そんな筈はありません。床下から天井裏まで捜したんだそうで」

「それとも主人が死ぬと一緒に、誰か持出した奴があるのかな」

「熊鷹の眼が二三十見張っている中から、巾着きんちやく一つ持ち出せるものじゃありません。まして千両箱を五十も百も」

「よし、判った。八五郎に揚足あげあしを取られるようじゃ世話アねエ」

平次は苦笑いをしました。

「そこで一つ、親分にお願いがあるんだが」

「何んだい」

「上総屋の番頭さんに逢って下さいよ」

「？」

「亡なくなった主人は、何処かに金を隠してあるに違げえねえが、何人かかっても見付かりそうもない。金が出なかつた日にゃ、後の恰好がつかないそうです」

「で？」

「番頭さん、構わないから入つて来てくれ。お前さんから、親分に話して見るが宜い」

ガラツ八は入口の方を振り向いて、大きな声を出しました。

「それじゃ、御免下さい」

静かに格子を開けて入つたのは、二十三四のまだ若い男でした。地味な風をしておりますが、ちよつと良い男でどこか笑顔に人をそらさないところがあります。

「お前さんは？」

狭い冢、初夏の風が吹き抜くように開けっ放してあるので、平次は坐ったままで、客の物腰がよく見えます。

「上総屋の手代で、仙之助と申します。八五郎親分にお願ひして、主人の隠した金を見付けて頂こうかと思いましたが、八五郎親分は、銭形の親分さんにお願ひした方が宜いと仰しやるので、先刻さつきから門口を拝借して、お待ちしておりますました」

若い番頭はそれだけの事を言ううちにも、すっかり恐れ入って、立て続けにお辞儀をしております。

たからさが  
「宝捜しは困るよ、番頭さん」

「へエ——」

「上総屋の案内を知った者が、幾日かかっても解らないというのに俺が行ったところで解るわけではない。そいつは岡っ引より易者えきしやへ行く方が早いぜ」

平次は宝捜しにまでコキ使われる馬鹿馬鹿しさが我慢がならなかったのです。でも、それじゃお嬢さんが可哀想でこさいます」

「お嬢さんが？」

「上総屋に金があればこそ、親類も知合もあの通り肩を入れてくれますが、何んにもないと判ったら、どうなることでございましょう。それにせつかく纏まとりかけた縁談も、お気の毒なことに駄目になります」

「縁談？」

「お嬢さんのお染そめさんは、たった一人娘で、この秋には御武家方から御養子が入らっしゃる筈でございました」

仙之助の心配するのは尤もつともでした。主人が死んだ上、金が一文もないと判つては、武家の次男坊がわざわざ町人へ養子に来る筈ありません。

「そいつは気の毒だが、どうも俺は宝捜しに乗出すわけには行かねエ。いずれ



分別人の上総屋のことだから、どこか容易に見付からないところへ隠してあるんだろう。お互に抜ぬけ驅がけの功名をする気にならずに、多勢で手を分けて探して見るが宜い。五十も百もある千両箱を、懐ふところへも袂たもとへも隠せるわけはないから」  
平次はそれつきり縁側へ出てしまいました。十万両の宝捜しよりも、朝顔の苗なえの方が大事だったので。

二

「親分、だから言わねエこっちやねエ」

ガラツ八の八五郎が飛込んで来たのはその翌る朝。

「何んだって腹を立てて居るんだ。俺は文句なんか言われる覚えはないぜ、八」  
平次は機嫌の好い寝起の顔を狭い庭から持って来ました。

「親分が御輿みこしをあげないから、とうとう人死ひとしにがありましたぜ」

「誰が死んだんだ」

「上総屋の甥の重三郎ですよ。その死にようが大変なんで、行って見て下さいよ、親分」

「よしッ、それじゃ出かけよう」

「まごまごして居ると、市ガ谷の富蔵親分が、誰たれ彼のかれ見境もなく縛たってしましますよ」

「縛たりたきや縛たらせておくが宜い」

そう言いながらも、事件が思いの外の重大性を持つて居ゐるのが平次の岡おかっ引本能こゝろを鼓舞ふします。

飯田橋中坂下の大地主、上総屋に駆け付けた時は、家の中はまだゴツタ返して居ゐりました。

「お、銭形の」

一番早く見つけたのは、山の手で顔を売った御用聞、市ガ谷の富蔵です。中年者の強したたかな顔には、さり気ないうちに敵意が燃えて、出来ることなら平次を一步も中へは入れたくない様子でした。

「市ガ谷の親分、何にか大変なことがあったんだってね」

「まア、見てくれ、白鼠しろねずみが柝落ますおとしに掛ったようなものさ、死んだ上総屋の主人も、飛んだ人が悪いよ」

富蔵はそれでも家内顔に先に立ってくれます。

家の中をザツと見て、平次も胸を悪くしました。よくもこう滅茶滅茶に叩きこわしたと思うほど何もかも原形を留めません。床も天井も引剥ひきはがしたまま、壁は落され、炉ろの灰は掻き廻され、戸棚も箆たんす筒も引っくり返して、千両箱の行方を捜した様子です。

ジロジロ四方あたりから見ている不安な眼差まなざしの中を、富蔵は裏の物置の蔭に案内しました。そこには稲荷いなりの祠ほくらがあつて、その祠の後ろ——崖がけへ横に掘ったお狐の穴とも思えるのが、入口を組み上げた材木と巨大な石が崩れ落ちて、若い男を一人、虫のように押し潰つぶしているではありませんか。



出入りの者や、番頭手代達の手で、崩れた材木と石を一応取片付け、死体を引出して筵むしろをかけたばかりのところ。

「これだ」

富蔵はそれを指して、酔っぱい顔をするのです。

「この穴の中に金があると思っただね」

平次は真つ暗な穴を覗きました。

「狐の穴の中に千両箱を隠すのは思いつきさ。盗る気で入った者が材木と石に押し潰されたんだからこいつは天罰てんばつとでも思わなきゃなるまい」

と富蔵。

「天罰にしちや手厳てきびしいね」

「天罰でなきや、下手人はお狐か、死んだ先代の主人だ。銭形の親分が夫婦づれで来ても、こいつは縛れっこはねエ」

市ガ谷の富蔵は少し皮肉な調子で、ニヤリと平次を見るのです。

「なるほど、金を穴の中に隠して、入口へ危ない仕掛をしておくのは、ありそ  
うな事だが、——本当に中に金があるのかな」

平次は崩れた入口から、中腰になって穴の中へ入って行くのです。

「親分、危ないじゃありませんか」

ガラツ八は後ろからその袂を押えました。

「狐が噛み付くとも思うのかい」

「狐は心配ないが、また崩れたら何うするんです」

「いちど崩れたんだもの、もう大丈夫さ。仕掛は種切れだよ。そんな心配する  
ろうそくより蠟燭を持って来てくれ。提灯には及ばねエよ、中は狭い上に浅い様子だ」

平次はそんな事を言いながら、恐ろしく念入りに穴の入口を調べ始めました。

「へエ、親分蠟燭」

裸蠟燭を二本、灯をつけたまま持つて来たのを受取って、平次はもういちど穴の中へ潜りましたか、やがて尻の方から出て来たのを見ると、失望の色が蔽おほうべくもありません。

「どうした、銭形の」

富蔵もキナ臭い鼻を持出しました。

「千両箱は愚か、ろくなお賽銭さいせんもないよ」

平次は泥だらけになった着物を払いながら、苦笑いをしております。

「それじゃ、親分」

ガラッ八もなにかつままれたような心持でした。

「中は恐ろしく狭い上に、苔こけで一パイさ、千両箱なんか隠せる場所じゃねエ。

それに、穴守あなもりのお狐もそう言っていたよ。生れてまだ千両箱と鼠の天プラにはお目に掛ったことはないってね」



「親分？」

「解つたよ八。お前は、金を隠していない場所に、危ない仕掛をしたのがおかしいって言うつもりだろう。その通りさ、この穴の中に千両箱が一束いっそくもあつた日にゃ、物事が素直に運び過ぎるよ」

平次はそんな無駄を言いながらも、忙しくその辺を捜し廻っております。

三

「市ガ谷の兄哥あにい、この仕掛は古いものじゃないぜ」

平次は落散る材木や、それを釣った縄切等を丁寧ていねいに調べました。

「どうせ新しいものに決つて居るだろうよ。東照権現様江戸御入府前からあるわけはねエ」

富蔵は一向気の乗らない様子です。

「それにしても新らし過ぎるよ。——死んだ主人の音次郎は三月前から寝て居たって言うが、この仕掛を拵こぎえたのは、どんなに間違っても、十日より前じゃねエ」

「？」

「この仕掛をしてから雨が一度も降らなかつた。その証拠は縄が真新らしくつて、石も木も上から流れて来る泥を受けた様子はねエ」

平次の言葉の意味の恐ろしさが解ると、皆んな黙り込んでしまいました。三月前から寝ていた主人の作ったものでないとすると、この仕掛の意味は深刻なものになります。

「それに、重三郎が穴へ入るつもりで、中腰になって、狭い入口を半分ほど入ったとき、綱か何にか引いて、仕掛の石と材木を落したんだ。こんな器用なこと

は、狐や亡者もうじゃに出来ることじゃねエ」

銭形平次の論告は、何の憚はばかるところもなく、誰の抗弁も許さずに、遠慮なく皆んなの耳に入って行くのです。

「で、何うしようと言うのだ、銭形の」

富蔵は少し我を折りました。

「一と通りみんなに逢って見よう。千両箱が出るか、下手人が出るか、それからだ」

平次は自分へ言い聴かせるように、こう言ったきり、黙って眼でガラッ八に指図をします。

「ここへ呼んで来ましょうか」

「うん、屍体の前が宜かろう。一人ずつ呼んで来るが宜い」

「へエ——」

ガラッ八は飛んで行つたと思うと、第一番にまず大番頭の和七を、襟髪えりがみを掴まないばかりに引つ立てて来ました。

「親分さん方、御苦勞様でございます」

物馴れた五十前後の男、弾力も圭角けいかくも失ってしまった、忍従そのもののような典型的な番頭です。

「番頭さんかい、——お前さんが店の支配をしているなら、主人が金を何処へ隠しておくか見当くらしいは付いて居るだろう」

平次はいきなり突っ込んで行きました。

「へエー、それが、その、私の口からは申上げにくいことでございますが、一風変つた御主人で、その日の勘定から、帳尻は私にさせますが、纏まとまつた現金は、何処へやりますことやら、ツイぞ見たこともございません」

そんな事があり得るだろうか、と言つたような平次の顔を見ながら和七は一

生懸命弁解に努めるのです。

「それで商売の方はうまく行ってるんだね」

「へエ、それはもう」

「お前さんはこの店に幾年居るんだ」

「足掛け三年になりますか——」

「それで支配人というわけか、前の大番頭はどうしたんだ」

「不都合なことがあって、身を退いたそうでございます。尤もその方は二年くらいしか居なかったようで」

「この家は番頭が長く勤まらないのだね」

平次は妙なところに気が付きました。

「そんな事もございません。現に仙之助などは、七年も勤めて居るそうで——」  
「大番頭だけ居るんだね」

和七は氣拙きますそうに黙り込んでしまします。

「ところで、上総屋の身上はどれほどあるだろう。支配人のお前に見当が付かないことはあるまいが——」

「それが、その、——地所と貸金では差引勘定借りの方が多くなります。世間の評判通り、何万両という金を隠してあれば別ですが」

世間の噂では——上総屋の土蔵の中は小判が一パイ。それを泥棒に狙わせな  
いために、入口の方へは何千貫とも知れぬ青銭と鏹銭びたせんとを入れておくとか、土  
蔵三戸前の腰張りの内側は、ことごとく金蔵になっていて、何万両とも知れぬ  
大判小判が入っていると云われて居りますが、三つの土蔵は主人が死ぬと同時  
に、たった一人残された娘お染の前もはばからず、親類と雇人が集って、滅茶  
滅茶にかき廻され、床も天井も腰張りも、無残に引き剥がされてしまいました  
が、大判小判は愚おろか、鏹銭びたせん一枚も出ては来なかつたのです。

## 四

次に引張り出されたのは、死んだ主人音次郎の弟で、居候並に扱われている音松という中老人でした。若い時はいくらか様子がよかつたらしく、放埒ほうらちに身を持崩した末五十過ぎてから兄の家に転げ込み、障子も張れば便所の掃除そうじもすると云つた、恐ろしく気の軽い男で、鼻唄交りにその日その日を暮している札付ボヘミアンの放浪者でした。

「兄は何万という金を溜め込んでいるに違いありませんよ。公儀御用を承わつて日光山の御修復ししゆふくまで引受けたこともある男ですもの」

「それを何処どこに隠してあるんだ」

平次は少し焦れじ込みました。このニヒリストは、話し相手を焦らすのを、話

術の玄妙と心得て居る質の男です。

「隠した場所が判って居れば、今頃まで放って置くものですか。あの支配人の和七が一番先に取込みますよ。尤も私だつて負けちゃ居ませんがね、へっへっ」

こう言つた調子の男は、平次の忍耐力でも長くは付き合いきれません。

三番目に姪のお今、——姪と言つても恐ろしく遠い姪で、親類書に載る顔ではありません。

「お前の知つてるだけの事を話してくれ」

平次はこの賢くないらしい娘からは、あまり大したことは期待しませんでした。二十三にもなるでしょう。丸ぼちやの可愛らしい娘ですが、笑つても、物を言つても、無智な愛嬌がこぼれそうで、これも付き合いきれないところがあります。

金があるかないかは素より知らず、この家に来てから五年になるが「ろくな



お小遣こづかいも貰もらわなかつた」と少し怨えんずる色があります。

番頭の仙之助は二三日前に平次が逢あつたばかり、ひどく興奮こんぷんしておりますが、言うことはハキハキして、何を措おいても死んだ主人の隠おした何万両の大金を、一番先に手に入れることに骨を折おっている様子です。

「親分さん、お願いでございます。金が出て来こなかつた日には、この家は立つて行きませぬ」

半ば絶望しながらも、平次の叡えい智ちに縋すがり付つこうとしているのが、痛々しいほどよく解とります。

「お前は、お染さんと何にか約束でもあるのかい」  
平次は思いも寄らぬことをズバリと言いいました。

「飛とんでもない、親分」

愕然がくぜんとして挙げた仙之助の顔は、まだ去りもやらず、その場の様子を見てい

るお今の顔とハタと逢つたのです。

「たいそう肩を入れるようだが」

「お嬢様には、お武家方から養子が来ることに話が纏まとまつて居ります。が、金の隠した場所が解らないと、その話の進めようがありません」

「それはお染も承知か」

「へエ——」

仙之助の一生懸命さには、何にか仔細しさいがありそうですが、それは平次の慧眼にも容易に解りません。

最後に呼出されたのは娘のお染でした。

「お前はお染さんかい」

物置の前、重三郎の死骸の側へ呼出すにしては、これはあまりに痛々しい姿でした。せいぜい十八九にしか見えない若々しさも、生得の麗質が年齢きんじを刻む

由もないほど玲瓏<sup>れいろう</sup>としていたためでしょう。「美しい」といったような、通り一ぺんの言葉で、これは形容される娘ではありません。人によつてはこの病的にさえ見えるなよやかさを、醜<sup>みにく</sup>いと見るかもしれないが、人間の血肉を盛った存在で、こんな不思議な魅力を持ったのを、平次はまだ見たこともないような気がするのです。

「お嬢さん、私の訊くことに、包み隠さず<sup>こた</sup>応えて下さいよ」

「ハイ」

お染は素直にうなずきました。そう言わなくなつたつてこの娘に嘘も掛引もあるうとは、平次も最初から思つても見なかつたのでした。

「亡くなった父さんが、どこへ金を隠したか、お前さんなら見当くらいは付く筈だと思つが——」

「私は、あの、そんなお金は、出て来ない方が宜いと思ひます」

お染は少し涙含んで居りました。奉公人や親類方が、隠された金を探し廻つて、氣違ひ染みた打ちこわしを初めるのを、お染はどんなに苦々しい心持で見ていることでしょうか。

「すると、お氣の毒だが上総屋の身上しんしょうは持たないそうですよ」

「それでも構いません」

「お嬢さんは、お武家方から来るといふ、養子が嫌なのですな」

「――」

お染は黙ってしまいました。

「死んだ重三郎は、店の者の受けはどうでした」

「さア、私には」

お染は内氣らしく尻ごみをします。

「お嬢さんは仙之助をどう思います」

黙って顔を染めた娘の顔から平次は何も彼も見抜いた様子です。

## 五

「さア解らねエ——親分、これはいつたい何処に眼鼻があるんでしよう」

ガラツ八は四方あたり構わず張り上げました。

「何万両かの金はどこかに隠されて居るのさ。それを皆んなで、一生懸命捜し廻っているんだ。命がけの宝探しだよ」

「へエ——」

「殺された重三郎の身体を見よう」

平次はガラツ八と富蔵を促して重三郎の死骸から筵むしろを剥ぎました。

「おや？」

ガラツ八はギョツとした様子で重三郎の傷を眺めております。

「気が付いたか、八」

「こいつは、上から落ちた材木や石に打たれて死んだんじゃありませんね」

「その通りさ。材木や石に打たれて死んだ様に見せかけて居るが、重三郎の頭を打ったのは、極く小さい石だ。——人間を丸ごと押し潰すような材木や石じゃないよ。第一そんな重いものを穴の上に持上げるのは、一人や二人の力では出来ない。それに、あの仕掛はツイ五日か三日前に拵こぎえたものだ」

平次の言葉は至って印象的ですが、恐ろしい疑問を次から次へと投げかけて行きます。

「？」

「重三郎は宝捜しのつもりで穴へ入って行った。——穴は狭くて身体を返すわけには行かないから、出る時は尻から出て来た。——大骨折で首を出した時、

誰か穴の外に待ち構えて居て、手頃の石で頭を打ち割ったのさ。上から落ちた石が、あんなに都合よく頭の上へ来るものか」

「すると？」

「企たくらみは思ったより深い。重三郎の懐中や袖の中をもう少し念入りに捜して見るが宜い」

平次とガラツ八は氣の進まないらしい富蔵に手伝わせて、死骸の身体を念入りに調べて行きました。

「こんなものが袂の中にありましたよ、親分」

「何んだ、大福帳の端っこをはさみで切ったのじゃないか、——いいなりのうしろ、  
あなのなか——と書いてあるのか、これは誰の字だ」

平次はまだその辺にうろうろしている大番頭の和七を呼びました。

「和七の表情は急に硬こわばります。

「この右下がりの筆癖ふでぐせは、お前に解らない筈はあるまい」

「亡くなった主人の字にも似て居りますが——」

「まだ外にこんな字を書く者があるだろう」

「へえ——」

「誰だ」

平次の問いは仮借かしゃくしませんでした。

「仙之助が主人を真似て、右の肩下がりの字を書きます」

和七はそう言うのが精いっぱいでした。

「親分」

ガラッ八と富蔵は顔を見合せました。合図一つで、飛出して仙之助を縛り兼



ねまじき気色です。平次はしかし、それを眼で押えて、それ以上追及しそうもありません。

その日の調べは、それで了おわりました。宝探しの深刻な競争は、まだ続いている様子ですが、平次はそんなものには眼もくれず、和七にいろいろの帳面を出させて解らないながらも一応眼を通し、それから大きな取引先を二三軒訪ねて、上総屋の財政状態を、出来るだけ調べました。

それから三日目。

「親分、大変ですぞ」

上総屋を見張らせていたガラツ八が、少し取りのぼせた形で飛び込んで来ました。

「何をあわてているんだ、八」

「音松がゆうべから帰りませんよ」

「音松？」

「死んだ主人の弟で、あの野の幫だい間こ見たいな野郎ですよ」

「何処へ行ったんだ」

「町内の湯へ行くって出たつきりですって」

「それは変だね、行って見ようか」

平次とガラツ八は時を移さず飛びました。飯田町の上かず総屋さやへ行って見ると、

音松の行方不明などは忘れたように、奉公人も親類も、相変らず宝捜しに夢中  
です。

「音松さんが、昨夜から帰らないそうじゃないか」

「へエー、そんな事は滅多にありませんが、また昔の病いが出たのかも解りま  
せんよ」

番頭の和七は心得顔でした。放埒者ほうらつもので鳴らした音松の悪名は、和七もことご

とく承知だったのです。

「どんな様子で出かけたんだ」

「まだ宵のうちでした、手拭をブラ下げて」

「下駄はを穿はいてかい」

「草履ぞうりを穿はいて、何んか変な道具を懐ろへ入れて行きましたよ」

小僧の直吉が口を挟みました。

「鍬くわや鎌かまじゃあるまいな」

と平次。

「そんな大きなものじゃありません」

「道具箱を見てくれ、何にかなくなつたものがないか」

「――」

和七は黙って物置へ行きましたが、暫らく経ってから、

「大鑿おのおのみが一挺見えませんよ、親分」

「よしよし、そんな事だろうと思つたよ」

平次はいきなり帳場へ行くと、この間見たばかりの大福帳仕入帳などをバラバラ繰って行きました。

「これだ、八」

指さしたのは、はさみ鋏で紙を切取つた跡が二カ所。

「そいつは何んです、親分」

八五郎はその意味が呑込めません。

「この近くに上総屋の寮か、隠居所がないか訊いでくれ」

「へエ」

八五郎は飛んで行きましたが、奉公人たち二三人に逢つて引返すと、

「寮も隠居所もないが、神楽坂裏に久しく明いて居る貸家が一軒あるそうです」

よ

こんな事を聴込んで来ました。

「よし、そこへ行こう。小僧を一人借りて来い」

小僧の直吉を先に立てて、平次と八五郎はさっそく神楽坂に向いました。

「此処ですよ、親分」

直吉が示したのは町裏の藪の中に置き忘れたような空家が一軒。裏へ廻ると、  
雨戸は一枚外したまま。其処からいきなり飛込んだ八五郎は、

「あッ、大変ッ」

四方構わず声を張り上げます。

「音松が殺されているんだろう。押入か床下<sup>ゆかした</sup>へ首を突っ込んで」

平次は静かに外から応じました。

「どうしてそれを？」

「懐ろの中には、古帳面ふるちようめんから切抜いた紙に、右肩下がりの字で、——神楽坂の貸家——とか何んとか書いたのが入っている筈さ」

平次の言葉は恐ろしいほどの中しました。

音松は空家の奥の六畳の押入に首を突っ込み、床板を剥はがしたまま背中からあい首を突き立てられてこと切れていたのです。

「親分、あの押入の床下に、千両箱がありやしませんか」

「馬鹿ッ、誰がこんなところに千両箱なんか持込むものか。あれば精々ねずみ鼠の糞くそくらいのものだ。それよりは、音松の身体を捜せ」

「帳面の紙片なんかありやしませんよ」

「曲者はこんどは持って行ったんだ。よしよし証拠は一つでたくさんだ。ところで小僧さん」

「へエ——」

不意に平次に声をかけられて案内の小僧は飛上がるほど驚きました。

「驚くことはない、——これだけ教えてくれ。ゆうべ音松が出た後か先に、飯田町の家を出たのは誰と誰だ」

「皆んな出ましたよ」

直吉の返事は想像を飛離とひはなれます。

「皆んなと言うと？」

「番頭さんは夕方から日本橋の御親類へ、仙之助さんは音松さんの出たすぐ後で、やはり町内の湯へ行ったようです」

「お嬢さんは？」

「お嬢さんは何処へも出ません」

「お今は？」

「お今さんも家に居りました。ひどく頭痛ずっとうがするって、御飯も食べずに、自分

の部屋へ入って休んだようです」

「それから？」

「それっきりですよ」

「親分、縛ってしまいましたしょうか」

ガラッ八は我慢のならぬ様子でした。

「誰を？」

「仙之助の野郎をですよ」

「もう少し待ちな——こんどは仙之助が殺される番だ」

「へエ——」

ガラッ八には何が何やら解わかりません。平次の言葉はあまりにも奇おかつ怪あやだったのです。

「それより、ゆうべの和七と仙之助の足取りを調べて来い。時刻を訊もき漏もらしちや



ならねえよ」

「親分は？」

「俺は上総屋へ行く。音松を刺したヒ首が、どこかに隠してある筈だ。捨てるにしちや下手人は俐口過ぎる。それから、和七と仙之助の外に、昨夜そつと脱出した奴があるかも知らない」

平次は直吉といっしょに上総屋へ引返して行きます。

## 六

平次が上総屋かずさやへ帰って来ると、此方にも大変な騒ぎがありました。

「親分さん、大変ですよ。お染さんが」

お今は持前の愛嬌をどこかへ置き忘れてもしたように、アタフタと平次を迎

えます。

「何うしたんだ」

「殺されかけたんです」

「えッ」

「朝のおみおつけに何にか入っていました。でも、お染さんは食の細い人だから、いくらも喰べなかつたんで助かりました」

平次はその話を半分聴いて、お染の部屋へ飛込みました。町内の本道が、玉子の白味しろみや油を吞ませて大方は吐はかせたそうで、今は疲労ひろうのために、うつらうつらしております。

「お、銭形の親分」

本道は坊主頭をふり向けました。

「何んだろう、先生」

「石見銀山かな。——お嬢さんの味噌汁にだけ入って居たところを見ると、企らんだ仕事だよ、親分」

「誰がその味噌汁を拵えたんだ」と平次。

「お勝手に、皆んなのと一緒にお鎌が拵えますよ。尤もお染さんは気分が悪いから、欲しくないうって言うのを、仙之助さんはそりや親切だから、自分でお膳まで運んで食べさせましたが——」

お今の説明には、何かしら含んだものがあります。

「仙之助はどこに居るんだ」

「市ガ谷の親分が縛って行きました」

大番頭の和七はおろおろした顔を出しました。

「たったそれだけの事か」

「仙之助の行李こうりの中に、石見銀山の使い残りあいくちと、少し血の附いたヒ首あいくちがありました。へエ、今聴くと音松さんが、神楽坂の空家で殺されたそうで、本当に怖ろしいことでございます」

和七は心なしか、ブルブル顫ふるえている様子です。

「市ガ谷の親分が仙之助を縛くわって行くのも無理はないが、そいつは少し早まったかもしれないよ。使い残りの毒や、血染のヒ首などは行李の中へ入れてしまつて置くものじゃねエ」

「左様でございます、親分」

この無能な大番頭からは、平次は何の反応も求められません。

この騒ぎの中へ、八五郎が帰って来ました。

「親分、二軒とも違いなく行っていますよ」

「で？」

「時刻も合っているようです。——尤も、神楽坂へ廻って、待つてなんか居ずに音松を刺して、すぐ帰って来るような手順に行けば別だが——」

和七と仙之助は一応不在証明アリバイを持って居るようですが、それが完全とは言いきれません。

「よしよし、俺にはだんだん解って来るよ。そこで番頭さん、今晚奉公人も親類の方も、皆んな集まって貰って下さい。あっしから話したいことがあるから」

「へエー」

「八は番所へ行って、仙之助を貰って来てくれ、たった一と晩のことだから、何とか話がつくだろう。平次が見張っていて、明日は間違いなくお返し致しますって言や宜い」

「へエー」

八五郎を出してやると、平次はもういちど念入りに上総屋の外廻りを調べま

した。

## 七

その晩、上総屋の奥に集まったのは、家族、奉公人、近い親類などざつと十七八人。平次はその緊張きんちようした顔を見渡して、静かに語り出しました。

八畳と六畳を打ち抜いて、燭台しよくたいが四つ、平次の前にはお染とお今。その横には和七と仙之助。親類方はその後ろへ、奉公人はその横に並びました。

「さて、皆の衆。こんな事を言うとは驚くかも知れないが、言わなきや何時までも皆んなの迷いが晴れまい。実は——」

平次は口を切つて、一座を見渡しました。

緊張しきった顔と顔、——多分平次の口から、二人まで人を殺した恐ろしい下手人げしゅにんの名を聞けるのかも知れないと思つてゐる様子です。

「驚いてはいけない。飯田町の上総屋、——神田から番町へかけても、並ぶ者が  
ないと言われた大分限だいぶんげんの上総屋には、気の毒なことに一文の金もなかつたの  
だ」

「——」  
水をブツ掛けたような恐怖と驚愕、一座は顔を見合せました。

「少なくて三万兩、五万兩、どうかしたら十万兩もあるだろうと思わせたのは、  
上総屋の主人の腕だ。まことは過すくる年の日光の御修復ごしゅうふくで下受請したうけおいの手違いから、  
工事のやり直しをしたために、十万兩からの出費で、上総屋は一文なしになつ  
てしまった」

「商人は信用を落しては一日も立ち行かない。上総屋はその秘密が知れそうになると番頭を代え、大金を何処かに隠してあると見せかけ、世間にもそう思わせて、苦しい店を今日まで張って来たのだ。死んだ後でいくら探したところで、十両と纏まとまった金が出て来るわけではない。皆んなも、もう床を剥いだり、壁を崩したりするような浅あさましい事は止した方が宜い。——この平次が、三日がかりで帳面を調べた上、取引先を一軒一軒訊いて廻ったんだから、これは間違いはない。お気の毒だが、上総屋に残るのは、少なからぬ借金だけだ」

恐ろしい失望が、十七八人の顔を暗くしましたが、その間にたった二人、厄介な因縁いんねんから解放されて、ホツとした顔を見合せた者があります。

「お嬢様」

仙之助は和七を隔へだてて、お染に声を掛けました。

「私は、私は——」



お染はさすがに『私は嬉しい』とは言い兼ねましたが、仙之助を顧みかえりたその明るい表情には、幸福感が溢あふれております。

「御安心なさいまし、お嬢様。お店は私が宜いようにいたします。一生懸命になつたなら、昔ほどではなくとも、お嬢様をお困らせするようなことはないでしょう」

上総屋が一文なしと決れば、武家方の養子は破談になるのに決つております。今までお染のために宝探しに熱をあげていた仙之助は宝がないと決れば、さすがにこみ上げて来る嬉しさをどうすることも出来なかつたのでしよう。

「仙之助はお染といっしょになつて、上総屋の身上を盛り返して行くが宜い。

——誰もそれに不服はあるまい」

平次のそう言う声も嬉しそうでした。が、事件がまだ片付いたわけではありません。二人まで大の男を殺した下手人は解つていなかったのです。

# 八

その晩、通り魔のような影が一つ、お染の部屋へスルリと滑り込みました。有明の行燈を吹消して、さかて逆手に持ったあいくち匕首が、お染の寝首へ――

「御用だッ」

曲者の匕首を持った手は無手むずと掴つかまれました。逆ぎやくに捻ひねって膝の下に敷くと、

「八、灯りだ」

平次の声です。

「おい」

手燭を持って、六法を踏むように飛んで来たガラッ八。平次の膝の下の曲者の顔を見て、さすがに仰天しました。

「こいつが曲者ですかい、親分」

「見るが宜い。——持前の愛嬌などは何処にもない、夜叉やしやのような女じゃないか——あッ舌を噛み切りやがった」

平次の膝の下で、殺人鬼のお今は、舌を噛み切ったのです。怨みと憤りいきどおに燃える顔は歪ゆがんで、キリキリと結んだ唇からは、糸を引いて血が流れます。

×

×

事件が済んでしまつてから、ガラツ八の燃える好奇心に対して、平次はこう言います。

「重三郎は主人の甥おいで、音松は主人の弟だ。この二人とお染を殺せば、万という金が遠縁ながら姪めいの自分へ入つて来るとお今は考えたのさ。重三郎を殺したのが、力の要る仕事のように思わせて、その実非力な仕業と解つて、俺は下手人は女じゃあるまいかと思つたよ」

「へエ——」

「帳面の紙を切つて、重三郎と音松をおびき出したのは、一応仙之助の仕業のように見えたが、右肩下がりの字なんか誰でも真似られるよ。——それから、音松を殺した晩は、頭痛がすると言つて、早くから自分の部屋に籠り、そつと窓から脱け出している」

「なアる——」

「石見銀山いわみと血染のあいくち匕首ことうりを、仙之助の行李ことうりに隠したのは、賢あこいようでも女の猿知恵さ。あんな事をしたので、いよいよ俺は仙之助が潔白けつぱくだと思つたよ。お今は自分の思う通りにならない仙之助が憎らしくてならなかつたんだ」

「——」

「上総屋には十両の金もないとわかると、こんどは仙之助と一緒になりそうなお染が憎くなった。お今は最初この家に乗取つて仙之助と一緒になるつもり

だったかも知れない——ともかく、昨夜はつきりお染と仙之助の気持が解つて、急にお染を殺す気になったのさ。あの愛嬌者のお今の顔が急に怖こわくなつてお染を睨んで居るのが容易でなかつたので、俺はお染の代りにあの部屋で待っている気になったのさ」

「へエー、驚いたことだね、親分」

「尤もつとも、お今のようなのばかりじゃない。女の中には、何万両の金がないと知れて、反かえつて喜ぶお染のようなものもあるよ。仙之助も仕合せ者さ」

「へッ」

「妬やくな妬くな、そのうちにお前にも、良いのを見付けてやるよ」

平次はそう言つて面白そうに笑うのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十五年六月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行  
銭形倶楽部

十万両の行方



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>